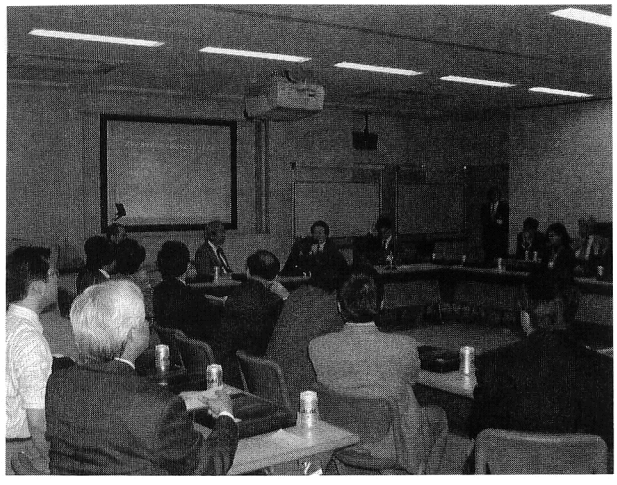
Optics Japan '99 雑感

Optics Japan '99（以下，OJ99）の最終日，私のことを捜している人がいるという話が伝わってきました．次の日，光科学及び光技術調査委員会（光委員会）委員長からOJ 99について「光の広場」の原稿を書いてくれないかという趣旨のe-mailをいただきました．「関西」がすぐにありましたので，そこで議論することにしました．今回のOJ 99はいくつかの新しい試みがなされていましたので，それについて意見がほしい，特に2日目のナイトセッションについて感じたことを書いてほしいとのことでした．私自身文才のないこと以外は断る理由もないので，感想なら書けるということで引き受けました．前置きはこれくらいにしましょう．

OJ 99は，ここ数年の「光学連合シンポジウム」や「Optics Japan」とは異なった形式で開催されました．個人的には，過去の学会と比較して楽しかったというのが素朴な感想です．会議全体は，プレナリー講演，シンポジウム，一般講演に分かれ，プレナリー講演は，学会内外でまとまった研究をされている方々の講演がなされました．シンポジウムは，実行委員・プログラム委員によってあらかじめ用意されたトピックスに対する口頭発表となり，大きな進展が期待される研究トピックスを取りあげていたこともあり，盛況な感じを受けました．できれば，講演申し込みの段階で各シンポジウムに対してキーワードを挙げるなど，もう少しシンポジウムの内容を明確にしてもよかったのではないかと考えます．実際，一般講演の中に，シンポジウムの企画意図に適合した発表があったと思います．一方，一般講演はすべてがポスター発表となり，どこの会場も非常に盛況で活発な議論がなされ，私自身を含め発表者および聴講者がくたくたになるほどでした．残念なことはポスター会場が狭かったことと，議論が白熱するあまりシンポジウムのほうに足を運ぶきっかけを失ったことです．



ナイトセッション

ポスター会場

講演申し込みの段階では一般講演のすべてがポスターになるということが知らされていなかったため，プログラムが発表された段階で違和感を感じた方も少なくなかったことと思います．しかし，学会が進むにつれて主催者側の意図が明確になってきた感もあり，申し込み段階と学会終了後の感じ方の違いに気がつきます．特に，2日目のナイトセッションにおいて実行委員の意図が明確になったと感じました．7月号の講演募集の中で「研究グループの活動が活発になるにつれて，光学会の縦割り傾向が生じつつあります」とありますが，これを打破しようという企画意図も終わってみればよくわかります．残念なことは，企画者の意図に参加者が沿った行動をとるかどうかは別にして，前もって十分に企画者の意図が伝わっていなかったことではないでしょうか．全体としては，パラレルセッションが少なかったため通常の会議より広い分野の発表に対して議論ができたこと，さらに，ポスターセッションが多数を占めたため細かい議論ができたことで「日本光学会らしい場」が提供されたのではないかと考えます．

学会で発表することの意義を突き詰めて考えますと，

懇親会風景

「金か人か」といえるかと思います．前者は，学会の場を通じて自分の研究をアピールし，次の研究をよりクオリティの高いものにするための資金を獲得するべく参加するということです．後者は，自分の行っている研究に対して，建設的な議論をしていただき，よりよい方向に研究を進めるために参加するということです．「日本光学会らしい場」といったのは，特に，後者に対する場の提供を重視して提供されていると考えられる今までの学会と同様，今回の学会がそれをより一層押し進める形で行われたことでしょう．では，前者はどうでしょうか．昨今，光オリエンテッドな大規模な研究プロジェクトが少ないといわれていますが，光の輝きが失われたわけではなく，光と機械，光と生物，光と医学，光と環境等の分野では，比較的潤沢な研究費が確保されているようです．ナイトセッションのひとつのテーマは，「多くの研究費を確保する次の光の研究は何か」を議論したかったのではないでしょうか．ナイトセッションの参加者からは，各自の研究テーマは他の研究者から強制されるものではなく，自由な発想のもと行うべきだとの意見が出ていました．それはそのとおりで，多くの研究者がそのように行動しているでしょう．しかし，多くの研究の中から大きな共通テーマを見いだし，同じ土俵で協調と競争をする場も必要であると考えます．ナイトセッションにおけるもう一つの主なテーマは，日本光学会のありかたについてでした．応用物理学会との関係については，独立問題是か非か，応用物理学会講演会とOptics Japanの差別化，「光学」や「Optical Review」のありかた等，議論がなされました．さらに，知的所有権や産業界への寄与が強く叫ばれる中，企業からの発表が少ないという現状において，日本光学会がサイエンス志向に偏りすぎてはいないか，エンジニアリングに対する評価が低いのではないか，といった議論があり，名前は「光工学会」がよいといった意見も出されました．

明確な結論はすぐに出るものではありませんが，われわれ若手にとっては，どういう議論が存在していて，各先生方がどのような意見をもっているかの一端を知る機会になったことは確かです．また，レーザー学会や日本分光学会等光関連の他学会との関係です．これについては，共同で講演会が開くことができないかという一歩進んだ考え方が打ち出され，少なくとも参加者からは否定的な意見はありませんでした．日本光学会の位置づけや他学会との共催会議を考える上で重要なことは，われわれが集金力と競争力を有し，建設的な議論ができる集団であることだと考えます．そのためには，研究の集約性と分散性を併せもつソサエティであることが重要なのではないでしょうか．

この記事に対するご意見は，itoh@bk.tsukuba.ac.jp，optics@kobe-u.ac.jpまでお願いします．

（徳島大学　早崎芳夫）